

小学六年

国語

解答と解説

1

問八 【例】			問六				問四			問二	問一		
に	と	善	た	帰	よ	貴	否	て	紅	オ	な	同	被
同	も	意	と	宅	に	樹	定	同	実	25	っ	情	災
情	あ	で	い	を	い	の	も	意	が	問三	た	を	し
す	る	や	う	遅	る	死	し	で	言	エ	と	寄	て
る	。	っ	こ	く	の	を	づ	き	う	26	い	せ	故
の	だ	た	と	し	が	受	ら	な	こ		う	る	郷
で	か	こ	。	、	つ	け	い	い	と		こ	べ	を
は	ら	と		家	ら	止	か	が	と		と	き	は
な	私	が		に	い	め	ら	、	自		。	相	な
く	は	相		い	の	切	。	親	分		手	手	れ
、	、	手	問七	る	で	れ	問五	切	の		と	と	ぎ
相	む	を	イ	時	、	て	何	に	経		し	る	る
手	や	傷	37	間	仕	い	も	し	験		て	を	を
と	み	つ		を	事	な	わ	て	と		見	得	なく
よ	に	け		減	を	い	か	も	が		ら	なく	な
く	相	て		ら	口	妻	っ	ら	ち		れ	く	な
コ	手	し		そ	実	と	た	っ	が		る	な	っ
ミ	の	ま		う	に	い	た	た	い		よ	っ	た
ユ	状	う		と	し	っ	手	手	す		う	た	、
ニ	況	こ	38	し	て	し	前	前	ぎ	27	に	、	21
			39							28			22
			40							29			23
			41							30			24
			42										

3

① 精根	問九	問八					
	境	子	所	る	ほ	子	
	で	育	の	た	か	ど	
	あ	て	大	め	に	も	
	②	つ	を	人	、	類	の
		た	す	、	親	を	脳
	③	装	る	会	や	見	機
		備	必	社	身	な	能
	④	宣	要	と	近	い	が
		戦	が	い	な	ほ	育
⑤	オ	あ	つ	人	ど	ち	
	率	る	た	を	の	一	
		と	周	中	時	人	
		い	囲	心	間	前	
		う	も	と	と	に	
		こ	カ	し	コ	な	
		と	を	て	ス	る	
		。	合	学	ト	ま	
			わ	校	が	で	
			せ	や	か	に	
			て	近	か	は	

問七  
頭部

問六	
に	自
も	分
好	た
奇	ち
心	が
を	生
い	活
だ	す
き	る
、	世
実	界
際	を
に	客
進	観
出	視
す	し
る	つ
点	つ
。	外
	界

問五		
め	作	自
に	し	然
役	食	を
割	料	利
分	の	用
担	確	し
し	保	て
複	に	非
数	活	カ
で	用	さ
共	す	を
同	る	カ
作	こ	バ
業	と	ー
を	と	す
す	、	る
る	目	道
こ	標	具
と	の	を
。	た	製

2

問一	イ	望	ケ
問二	ウ	む	ー
1	イ	形	シ
2	ウ	で	ヨ
3	エ	実	ン
3	イ	現	を
問三	ウ	で	と
4	イ	き	つ
4	ウ	る	て
問四	ま	よ	相
ま	ま	う	手
な	な	に	の
ら	ら	な	望
な	な	り	む
		た	こ
		い	と
		。	を
			相
			手
			の

(配点) ① [問一・四] 各10点、[問六・八] 各15点、他各5点  
 ② [問二・四・七] 各3点、[問五] 12点、[問六] 8点、[問八] 15点、他各5点 } 計150点  
 ③ 各2点

【解説】

1 濱野京子の『この川のむこうに君がいる』（理論社）から出題しました。

宮城県で東日本大震災を経験し、家族とともに関東へ引っ越してきた梨乃の体験と、その時に梨乃が感じたことが描かれている場面です。

問一 B2 具体化 推論

「かわいそうな被災者になった」という表現の意味を具体的に説明する問題です。「故郷」「同情」という二つの言葉を使うことが条件となっています。ただ被災した人というあつかいをされるのではなく、被災したうえに故郷を離れざるを得なくなつて転校してきたということ、それゆえ同情を寄せるべき相手であることを盛りこんで解答を作りましょう。①被災して故郷をはなれざるを得なくなつたという事情が書かれているか、②同情を寄せるべき相手だという評価が書かれているか、③①②に過不足がないか、④表記や表現が正しいかを中心に見ていきます。

問二 B1 理由 比較

陶子も紅実も、梨乃がやりたいと思つていたクラリネットを演奏しています。ただし、——線②の直後に書かれているように、梨乃はそのこと自体をねたんでいるわけではありません。部活をやるような余裕もなくそんな気持ちにもなれなかつた自分分は、二人と置かれた状況が決定的に違つているのだと思ひ知らされたのです。ア「無神経なことを言う」、イ「うらやましかつた」、ウ「実力を見せつけている」、エ「心の底から好きになわ

ではない」がそれぞれ誤っています。

問三 B1 具体化 比較

倒置が起こっていることよつて、本来文の前半に来るはずの「善意によつて」が後ろにきて強調されています。紅実が梨乃の「ただ、ふつうにしてほしかった」という願望を崩したのは確かですが、紅実は悪意があつてそうしたのではなく、むしろ善意からの言動で崩したのだ、ということがより明確に表されています。したがつて、エが正解となります。ア「言いようのない情けなさ」、イ「善意に見せかけた悪意だと思えず」、ウ「本当に感謝している」、オ「申し訳なかつた」がそれぞれ誤っています。

問四 B2 理由 推論

「曖昧に」という表現から、梨乃が本心から笑っているわけではないことが読み取れます。——線④の三行前には「紅実は、最も梨乃に親切にしてくれた生徒でもあつた。紅実のおかげで、孤立しなすんだ」と書かれています。この点において、梨乃は紅実の言動にありがたさを感じてはいます。ただ、実際に被災した自分の経験から被災地での出来事を美談として語ることはどうしても同意できず、反発する部分もあります。以上ことから、紅実の発言に対して表立つて拒否や否定もできず、かといつてその通りだとも思はず「曖昧に」笑うことになつてしまつています。「自分の経験とちがうので同意できない」「紅実に親切にしてみらつていたので否定しづらい」という要素を盛り込んで解答を作りましょう。①紅実が口にしたことが自分の経験したことと違うので同意できないという内容が

書かれているか、②「紅実の親切にしてもらった手前否定しづらい」という内容が書かれているか、③①②に過不足がないか、④表記や表現が正しいかを中心に見ています。

問五 **B1** 具体化 関係づけ

問四でも確認したように、いくつかの点でありがたさは感じているものの、心からの善意で正しいと信じ切って行われる紅実の言動は梨乃にとってストレスを感じさせるものになっています。本当の事情はわかっていないのに、さもわかっていような言い方をしないでほしい、という梨乃の気持ちは、——線⑦の七行前で兄の貴樹のことを考えている場面で表現されています。

問六 **B3** 具体化 推論

線⑥の直前に「転勤先で必死に働く父は、以前よりも帰宅が遅くなった」とあることに注目しましょう。父は仕事を必死にこなすことで家に帰る時間が遅くなっています。それが「仕事に逃げる」と表現されているということは、仕事を口実にして父が何かを避けようとしていたということになるでしょう。梨乃が家での生活を思い出している場面で、兄の貴樹が亡くなったことを受け止め切れていない母（父からみれば妻）の様子が描かれていることがポイントです。「遅くまで仕事をして家にいる時間を減らす」「妻が貴樹の死を受け止め切れていない状態である」「妻と向き合うのを避ける」という内容を盛り込んで解答を作りましょう。①家にいる時間を減らす②息子の死を受け止め切れていない状態である③妻と向き合うのを避けるという父の意図が書けているか、④①②③に過不足がないか、

⑤表記や表現が正しいかを中心に見ています。

問七 **B1** 理由 比較

母が身につけるものを編もうとしなかった理由を問う問題です。行動の理由を問われているので、その時の母の心情を最初におさえておきましょう。ここまでの問題でもみてきたように、母は大地震とその後の津波によって息子である貴樹を失ったことを、完全には受け止め切れていません。家族が身につけるものを編めば、完成した時に「これは貴樹に身につけてほしかった」という心情が生まれるでしょう。母はそうにして貴樹の不在を思い知らされるのが嫌で、身につけるものを編もうとしなかったのだと考えることができます。ア「貴樹のことばかり考えていることを家族に知られたくなかった」、ウ「編み物の良さが失われる」、エ「家族が喜んで使ってくれるかどうかわからない」、オ「編み物を始めたばかりの自分には難しいだろうと考えた」がそれぞれ誤っています。

問八 **C1** 具体化 理由 推論

本文では、善意からくる紅実の言動に対して梨乃が苦々しく思っている様子が描かれています。ただし、紅実はそれに気づいておらず、悪意をもっている様子は読み取れません。これらの内容をふまえ、他人の置かれた状況に同情することにたとえれば賛成であるか反対であるか、または、どちらでもなく独自の考えがあるのかという立場をはっきりさせると意見記述が書きやすくなります。どのような立場をとるにしても理由をそえて説明しましょう。①本文の内容をふまえて、他人の置かれた状況に同情することに対する自分の立場が書かれているか、②①

の理由が書かれているか。③①②が論理的に書かれているか、④①②③に過不足はないか、⑤表記や表現が正しいかを中心に見ています。

② 長谷川眞理子の「ヒトはなぜヒトになったか」「科学は未来をひらく〈中学生からの大学講義〉」3『桐光学園十ちくまプリマー新書編集部編・所収 筑摩書房から出題しました。森の中で生活していたヒトはチンパンジーとわかれてサバンナに進出し、現在まで進化してきました。その進化の過程を追いつながら、脳の変化について述べた文章です。

問一 B1 具体化 比較

「彼ら」はサヘラントロプスとオロリンを指しています。両者がヒトの祖先だとわかる理由は異なっています。サヘラントロプスは頭の骨の真下に背骨がついていること、オロリンは大腿骨が二足歩行の動物のものであることがその理由です。したがって、イが正解となります。ア「大腿骨しかなく頭部の様子がわからない」、ウ「頭の後ろから背骨が出る形」、エ「直接くつついておらず」、オ「二足歩行の生物とは大きく異なっている」がそれぞれ誤っています。

問二 A2 関係づけ 知識

接続語の問題です。前後の内容をおさえ、どの部分とどの部分が、どのような関係で接続されているかを考えましょう。

1 前の段落の最後の文には「ひと昔前までは、ヒトは生活の場を森から平原に移し、その影響で二本足で歩くようになった」とされていたのだが、森での生活の時点ですでに二本足で歩

ていたことがわかった。この頃の類人猿は、二足歩行をしつつ、木登りもできるような体つきをしている」と書かれています。これに対して直後の部分では「しばらくはまた森と平原の両方において生活していた」という内容が書かれています。同じ内容を別の表現でまとめ言いかえていることから、「つまり」が当てはまります。

2 直前の文には、サバンナの植物が水分をあまり含まず乾燥していることが書かれています。これに対して直後の文では、そうした植物の外殻が固いことや、水分を含む実の部分は地中に埋もれていることがほとんどであるという事実が指摘されています。植物の特徴を並べて説明していることから、「また」が当てはまります。

3 直前の部分では、ヒトとチンパンジーやゴリラの脳に、当初はあまり差がなかったことが書かれています。これに対して直後の部分では、サバンナに出ていった時に一回、さらにホモ・サピエンスが登場した時にもう一回脳が大きくなったことが示されています。すなわちヒトとチンパンジーやゴリラの脳の大きさに大きな違いが出たということです。以上のことから、「しかし」が当てはまります。

問三 B1 関係づけ 比較

空らんにあてはまる表現を選ぶ問題です。この段落では、チンパンジーの系統がわかれてからも、ヒトはしばらく森と平原の両方で生活していたことが書かれています。この事実に合う表現は「平原に出る前、つまり森にいるうちからその準備として二足歩行を始めていた」という内容になります。したがって、ウが正解となります。ア「出た後で」、イ「両方で四足歩行」、

エ「使い分けた」、オ「しばらくは四足歩行」がそれぞれ誤っています。

問四 **A2** 関係つけ 知識

ヒトの手は器用さを重視した手であり、つめもあまりするどくはありません。したがってつめで掘り進むことはあまりうまくいかなかったであろうと考えられます。③に入る表現は「なかなかうまくいかない」という意味の表現になります。すべてア段の音、という条件から「ままならない」、本文中では「ままならぬ(かった)」が正解となります。

問五 **B2** 具体化 推論

線④をふくむ文を一文全体でとらえると、「このときを契機として」という表現が見つかります。指示語をさかのぼって指示内容を確認すると、五行前に「彼らはこの難局にどう適応していったのか」とあり、直後に「一つは」、二行後に「そしてもう一つ」と並列の形で二つ説明が書かれていることがわかります。並列されている二つ、すなわち「自然を利用して非力さをカバーするような道具を作って活用した」「目標のために役割分担して複数で共同作業をした」という内容を盛り込んで解答を作りましょう。①自然を利用して非力さをカバーするような道具を製作し活用するという内容が書かれているか、②食料確保という目標のために複数で役割分担をして共同作業をしたという内容が書かれているか、③②①に過不足がないか、④表現や表記が正しいかを見えています。

問六 **B2** 置換 推論

「同じ」とありますから、共通点を意識して本文を読み直しましょう。——線⑤の直前の「それ」という指示語に注目すると、脳が大きくなって自分たちが生活している世界を客観視しつつ、同時に外の世界に何が広がっているのかについて興味を持ち始めたこと、さらに実際の行動としてそこへ出て行ったこととの三つを指していることがわかります。以上のことから、地球で生活している私たちにとって宇宙を目指すことは、「住む世界の客観視十外の世界への興味」という点でヒトが「実際に外界に出たこと」と共通点を持っているといえます。①住む世界を客観視しつつ外の世界に興味を持つという内容が書かれているか、②実際に出て行ったという一連の流れが書かれているか、③①②に過不足がないか、④表記や表現が正しいかを中心に見ています。

問七 **B1** 関係つけ

⑥前後から、「産むときに大きくできないもの」「最終的には大きくなるもの」が入ることがわかります。この段落の先頭に「ヒトは大きな脳を持つようになった」と書かれていることから、「脳」に関する部分であることもわかります。これらの条件と二字という字数の条件をすべて満たすものを意識して探すと、——線①の四行後他に「頭部」が見つかります。

問八 **B3** 具体化 推論

線⑦の二行前に「だからこそ、ヒトは社会全体で子育てを行うようになったのだ」とあります。接続語をたどって前の文を読むと、脳が大きくなったことと一人前に成長するのに時



間がかかるようになったことについて触れられています。前後して「社会」が何を指すかについても説明されています。これらの内容をふまえ、この段落の内容をまとめて解答を作りましょう。①脳機能が一人前になるまでコストがかかるということが書かれているか、②親を中心とした周囲の協力が必要であることが書かれているか、③①②に過不足がないか、④表記や表現が正しいかを中心に見ています。

問九

B1 関係つけ

ぬけている文をもとにもどす問題です。このような問題では、いきなり本文を読んで探すのではなく、ぬけている文自体から前後にどのような内容が来るはずか、というヒントをしつかり見つけ出してから探すようにしましょう。その際、特に「指示語」「接続語」には注意が必要です。今回の脱文には指示語や接続語はありません。「まず」と書かれていることから、「水がほとんど存在しない」という内容が何かと並列する形で書かれていることがわかります。これをふまえて「水がほとんどない」と話題が重なる部分を探すと、②の後でサバンナの過酷な生活環境が説明されており、《2》を含む段落の最初に前に述べた事柄が続くことを示す「次に」とされているのが見つかります。

立場はすっかり逆転してしまった」、イ「草食動物も食料にするようになり」、ウ「様々な能力がまんべんなく強化されている」がそれぞれ誤っています。また、エに書かれている内容は本文の——線⑤を含む段落の二つ前の段落、オの内容は⑥の次の段落の内容と一致しています。

問十

B1 具体化・抽象化 比較

本文の内容と一致する選択肢を選ぶ問題です。選択肢全体をながめて合っているかどうかを検討するのではなく、本文のどのあたりをもとに書かれた選択肢なのかを考え、実際に本文と照らし合わせながら正誤を判定していきます。ア「両者の